

## I 研究の経緯・問題の所在

第98回全国大学国語教育学会における課題研究発表「書くことの教育の系統化—指導系統案の比較・検討を通して—」では、その最後に「『書くことの教育』の方面性・展望」を明らかにした。そこでは、「生活」の問題を中心に、「自発的表現に即しての指導」と「系統的・体系的指導」を表現の意欲性・指導択性とどのように合理性を持たせて学校教育という場で具現化していくのかが大きな課題であることを指摘した。さらに、近代から現代へのパラダイム・シフトの視点として「自己」から「他者」を設定する際に、書くことをめぐる問題として次の3点を掲げた。

- 1 文化としての書くこと
- 2 聞き話すことと書くこと(生活のことば)
  - ① 書くことの口新性
  - ② 生活のことばとしての書くこと
- 3 電子テキスト=ネットワーク社会における書くこと

第99回全国大学国語教育学会における自由研究発表

「生活記録運動の意義——『ことばの学び』の視点から——」では、第一の視点「文化としての書くこと」について、生活綴方の「大人版」とされた生活記録および生活記録運動の意義を、関連諸科学<ライフ・ヒストリー(ライフドキュメント)・社会学・文化人類学、ライフストーリー・心理学、実践記録・社会教育学>の研究の成果にも学びつつ、「ことばを介して「他者」と出会うことで変容しつづける」ことを「ことばの学び」とする視点から捉えてみた。その結果を、

- 1 生活記録運動の指移から見えること
- 2 ライフ・ヒストリー(ライフドキュメント)・ライフストーリーとのちがい
- 3 社会教育実践記録との関係
- 4 生活記録の変容
- 5 生活記録運動のこれからと課題の観点から整理して提示した。

これからの「書くこと」の学びと育みがどのような状況・場で生成し、されるのかについて、生活のことばとしての「書くこと」の実践のひとつの形であると考えられる、生活記録とその具体的な展開の例として「生活記録交流誌「北の風」」を取り上げてその様相をとらえて手がかりを得たいと考える。

## II 生活記録(運動)の位置

生活記録(運動)の特性を日本作文の会(1958)の「生活綴方事典」の「定義」から見てみる。

【定義】以上あげた四つの属性(即物的思考性・生活言語性・集団性・持続性…引用者注)をふまえて、生活記録をつぎのように定義することができる。生活記録とは、おとなが、自分の感じたことを考えたことを、ほかの人びとに伝えるために、その感じや考えの発生のきっかけとなった事物を、借りものでない自分自身の生活のコトバで、具体的に書いた文章である。そしてそれは、自発的に形成された小集団のなかで、特続的に書かれることが本来の形である。発生的にみれば、子どもの人間形成のための教育方法として戦前から行われてきた生活綴方に学んで、おとなが人間政造のための自己教育の方法として戦後にはじめたものである。

さらに、四つの属性を二大別して「生活言語性」と「集団性」に絞って同書の説明を取り上げる。

【生活言語性】「自分ノモノニナツタコトバ、体験 ト思老ト感動ニウラヅケラレタ生活ノコトバデ」「グレニモワカルヨウニ、ハッキリト」書く(国分 一太郎・「生活綴方読本」という点でも、生活記録は生活綴方と共通する。戦前の教育を受けたおとなは、美文調のスタイルで書くくせがついている。それは密室で、ひとりごとをいうときのスタイルである。生活記録は、日常生活の言語が、もともと、互に意志を伝え合い、協同して働くために生まれたものであることを忘れない。自分の感じたこと考えたことを、なるべく的確に、



いきいきと、ほかの人に伝達するために生活記録は書かれる。そのためには、文体は、ひとりごとの形から、当然対話の形をおびようになる。また、既成の概念を発生状況に照合させる内容上の操作に対応して、できあいコトバを日常生活のなかでつかっているコトバにつきあわせて、借りものでないコトバをつくっていく表現上の操作が行われる。

【集団性】生活記録は、孤立した個人の独話ではない。それは、サークル(自発的に形成された小集団)のなかで行われる集団的事業である。小・中学校の子どもの場合、義務教育制のなかで、学級というすでに編成された制度的小集団のなかで、進級または卒業という一定の期間のなかで行われる。しかし、おとなの場合は、小集団の形成も持続も、すべて義務的でなくて、自発性にもとづかなければならないといううちがある。新聞の投書や、個人で書かれた身の上話や体験談のようなものは、それ自体は「生活記録」とはよべない。そうしたことがきっかけとなって継続的なグループができていく場合に、生活記録ということができる。生活環境を同じくする人びと、または生活環境や年齢のまったくちがった人びとが、お互いの感じ方・考え方・生き方のノートをくらべ合い、気がねなく批判し合うことを通して、自分の体験と他人の体験とがつながっていることを感じとり、自分の体験の意味を、しだいにひろがっていく社会関係のわくのなかで認識していくようになることが、生活記録を集団の事業とよぶ理由である。

このように、第二次世界大戦後の民主的な社会形成の実践方法として、生活綴方的教育方法を援用したことがわかる。しかし、その生活記録(運動)の成功例であると考えられる刊行図書においても、すでに当時の生活記録の限界について、実践的に把握されていたことが明言化されている2)。

生活記録だけではだめ

生活記録だけで、「物の見方」などが深まるかというというわけにはいかない。第一、生活記録を書いて行くうちに、わからない問題がいっぱいに出てきて、その問題がわからないために記録に、力強さと、批判力が不足してくる。(中略)

## 二、文学

生活記録は文学かどうか、といったことについて

では、今のところ「生活記録は生活記録」という段階でいいのだと思う。「生活記録は文学だ」といいたい人にはいわしておけばいいし、「生活記録は文学でない」といいたい人はそれでまたいいのだと思う。ただ私たちは、多くの人達の胸をうつ生活記録が生まれても、すぐさま「農村における「太陽のない町」だ」とか「これこそ真の国民文学」といったいい方をしてもらいたくない。もちろん、「太陽の季節」の石原慎太郎に似ている」などとは、まちがってもいってほしくない。

ただ、文学専門の方からは、専門家としての立場からいい知恵をかせてほしい。たとえば、これは文学者ではないが、同郡出身のすぐれた版画家、上野誠氏は、

「若者」はまた、形象化の問題について考えさせてくれました。

「汗が、サン橋に散って斑点をつくる」(小幡志津)「めんどくせー」「仕事かしてー」(出口将治)のような集中された表現によって、作者の姿が浮彫りになってくるのは何に起因するかということ。

山口君たちは、このような必然的な情景描写と、言葉の選択の遥か以前に、現実との格闘に於て、火花を散らしている。それが、すなおな叙述の起伏を経て、要約集中され、文字となって火花を散らせる。ここに文章による形象化がある。

と、親切な長い手紙をくれた。私たちはそこではじめて「現実との格闘で火花を散らしている」者でなければ書けない表現を指摘され、これを大切にのばさなければならないということを知った。私たちはまじめな専門家から、学ぶべきものはけんきょに学ばなければいけないのだ。

このように生活記録は、しんけんに生活するだけでなく、いろいろな知識を豊かに身につけることによって、一層ねうちのあるものになっていくのだ。

ここからは、生活記録の手法が、生活の矛盾や問題を発見していくことの有効性があるものの、それを具体的に解決していく方法の見いだしにくいという生活教育に関わる共通の課題に直面していることがわかる。

さらに、当時の生活記録は、国民文学などの能響もあって、文体の位置づけの問題にも巻き込まれていた様子がうかがえる。これは、また生活記録(運動)衰退の一因とも考えられる。しかし、ここ



では課題解決のためには「知識」を得て「しんけん」な「生活」を「ねうちのあるもの」にしていくな必要のあることを、エピソードを交えて指摘している。

一方、理論的には生活記録(運動)の意義が次のように考えられていた3)。

わたしは、現代の日本の社会で、生活記録運動を、すすめていく価値が、あるし、それは必要だと考えている。リースマンのコトバをかりれば、伝統活向型(その日本版は天皇制志向型、それは右翼にも左翼にもある)、他者志向型(大衆社会的状況)にたいして、内部志向型を、ひとりひとりが、自分のなかにつくりあげていく手段になると考える。このように位置づけたのは、鶴見和子氏であったが、20 数年後に生活記録(運動)の推移を次のように振り返っている4)。

生活記録運動は 1951 年から 60 年代の初めまでが、初発期と高瀬期です。全国にさまざまなサークルが、雨後のたけのこのように出てきました。

二番目は沈滞期。60 年安保が終わった頃からです。60 年代を通して、壁にぶちあたったとか、行きづまったとかさまざまにいわれました。職場のサークルはつぶれてしまったし、農村の青年・婦人サークルはほとんど行政の中にとりこまれてしまった。(中略)ところが、現在は第三期(再生期…引用者注)になるとおもいますが、新しいいろいろな形で、生活記録運動がよみがえりつつあります。(中略)

再生期には社会運動との結びつきが出てきた。公害反対運動との結びつきです。生活記録運動というのは非常にパーソナルなんです、ここでもどう結びついたかという、結びつける人がいたからなんですね。(中略)<四日市・水俣・長崎・広島・戦争体験…>第一期(初発期・高瀬期…引用者注)は文学によって書いた。ところが、現代はもう一つ手段が加わった。映像によって記録するということです。このやり方が、今後すすんでいくだろうと思います。

このような状況は、1970 年代に盛んになる社会学などにおけるライフ・ヒストリー研究にも相補的に支えられており、加えて 90 年代に入る頃からの、精神世界への関心、自分探し・自分史・個人史などの流行がある。このことは、生涯発達心理学におけるライフストーリー研究の発生にも繋が

ってきていると考えることができる。

### III 生活交流誌「北の風」

1998 年に創刊された『生活記録交流誌「北の風」』は、その活動母体である「風の会」の前進である「村の根っ子の会」の指導者であった高橋徳義氏の死後、彼との約束という形で実現したものである。

「北の風」発刊によせて

「村の根っ子の会」というグループがあります  
高橋徳義さんという人が育てました  
地域で農業をつづけながら生きていこう  
そんな決意をして集まり  
二十五年になりました  
米がダメ 畜産がダメ 果樹がダメ  
もまいしつづけ  
今も、もまいしながら百姓をつづけています  
こころ ゆるしあい  
支えあう友がいるからつづけてきました  
こんど、生活記録交流誌「北の風」をつくりま

す  
高橋徳義さんとの約束だったからです  
人としての生き方を  
もっとおおぜいの方々と  
語りあい

こころ ひとつに生きたいから  
「風の会」を新たにおこします

次に『北の風』(花鳥賊康繁編集、北の風出版印刷、風の会発行)(北の風出版は、あすなろ書店内)の全号の内容をその目次を掲げることで見てみる。なお、「風の会」の活動の様子などがわかる部分は、それぞれの本文を引用して提示した。

○創刊号 98 年／春(1998 年 4 月 15 日発行)風の会 B5 版(25 ページ)

高橋徳義さんを偲んで(土田茂範)「高橋さんは、生きていたあかしを、文章にして残せと言いつけてきた。そして、わたしたちに、二千枚の原稿用紙という形にして、自分の思いを残していった。」半世紀過ぎても一中国引揚げの思い出から一(阿部千恵子)

便利さが怖い(柴田しづ子)

詩 伊藤保子 手紙/真昼の蛍光灯/雨

野菜の花(山口和子)

姫路の思い出(伊藤保子)



大ケヤキ(山口和子)

「村の根っ子の会」と私(門脇利永)「発足当初から数年間は、演劇や、結婚を祝う会の準備、学習会、それに定例集会等、集まる回数も多く、お互い話し合う機会も多かったと記憶しています。だが、近年は、特別な行事がない限り、年に二、三回くらいに減ってきている。それでも、いざという時はみんな集まってくるし、回の解散の話など誰からも出ない。」

ここからは、複数の会の活動が行われていることや、回数が減ってもその存在意義が認められていることがわかる。

私の一生の宝(矢口治男)「仲間たちの『結婚を祝う会』と『野菜の直売』、そして、文学などしげ子に接する機会を得たことなど、数えきれない。」

「親だけでなくその子ども同士が、親とともに会員との交流ができる機会を得た。本当にうれしい事である。ぜひ、この子ども達にも「根っ子会」の良さを教えてやるとともに、今後子ども同士が交流を深めていくことを願っている。」「会員が困っているときは、農作業を手伝いにも行った。こうした苦境にたった時の励ましや、手助けの気持ちで結ばれている仲間が『根っ子の会』会員である。」

ここでは、複数の会の活動とともに大人相互の交流に子どもたちの参加が行われ、子どもたちの交流の場と発展していくことへの期待が述べられている。

虹を追って(花鳥賊康繁)

編集後記(花鳥賊康繁)「わたしたちの『父』、高橋徳義さんは、『生活の中から自分のモノサシをつくれ』と語りました。わたしたちの生活を、知識や学門から照らすのではなく、まず生活をまろごと、きちっと見つめたいと思います。だから、『生活記録』にこだわりました。つらさや、困難さを乗り越えた生きる力を、みんなで育てあげられたらと思います。そして、その人々のつながりから、ぬくもりのある「北の風」をまきおこしたいものです。」

○第2号 98年/夏 (1998年7月15日発行)B5版 (25ページ)

ムラにこだわりムラに生きる(高德徳義)「日本児 童文学」1989年10月号(418号)

伝永遊びの秘めている力(土田茂範)

父への挽歌(阿部千恵子)

時 日曜日/ひとりごと(伊藤保子)

あぜ道で立どまると(山口和子)

せちがらい世の中で(青柳今日子)「亭主達が、若いころから『根っ子の会』というサークルを作っていたので、サークルの会員と結婚した嫁さんたちも亭主達に便乗して『根っ子の会』に入会した。会に参加するたびに、信頼感をふかめることができた。そして、苦しいことや悲しいことをわかちあい、一緒に世の荒波を乗り越えていこうという精神が、みんなの心にあったような気がする。／夫が病気で入院したときは、牛舎の堆肥がたまって私一人ではとてもできないときに、『根っ子の会』の人達が来てくれてみんなで出してくれた時のとてもうれしかった事、今も忘れない。」

農家生活の醍醐味(伊藤保子)「何をお返ししようか?そうだ。徳義さん原作の「おらあ腹ぺこ豆戦士」の演劇に誘っておかえしとしよう…。私のほうも、一緒に演劇を観る連れ合いができるというものだ。／美喜ちゃんも、演劇を観るのなんて久しぶりだと言い、いい演劇だったと感激してくれた。」

この二つの文章からは、「風の会」の互助性と生活文化性が見て取れる。

雨降りきのこ(吉田晴栄)

風にのせて

心友へのさまよい 童画家・久米宏一さんとの  
邂逅(花鳥肌康繁)

編集後記(花鳥股康繁)

○第3号 98年/秋 (1998年10月20日発行)B5版 (36ページ)

藤沢周平君を弔す(土田茂範)

異常が正常(横山良介)

ひとつぶの米(山口和子)「伊豆さんは「薬一本の革命」という本を読んで、都会暮らしから、いきなり長野県下伊那郡に一家で移り住み、今は自然卵で生計を立ててる人だ。／『生きる』という姿勢にだつぼうである。『みたばら通信』などという生活記録も発信している。」

ここでは、「風の会」の会員が遠くの地の活動グループとも生活のレベルで交流している様子がかがわれる。

たった一人の級友(阿部千恵子)

特集 竹田喜美代 ・置物のカエルたち・63歳のアンネ・フランク様へ・子育て日記帳



水で乾杯(吉田晴栄)

畑仕事(半田 都)

平先生からの絵葉書(伊藤保子)

詩 初秋／対決(伊藤保子)

消しきれぬ地獄図絵(村山基一)

大高根基地斗争を語りつぐ「弾道下のむら」私  
記編集後記(花鳥賊康繁)

「私事になりますが、東根市神町営団区の「営  
団開拓五十年史」の発刊を手伝わせていただきま  
した。原生林にいどんで開拓した土地を、日本海  
軍、そして戦後はアメリカ軍に接收される苦難を  
しいられ、たたかいつづけた地域史です。植松要  
作さんという農民児童文学作家を生んだ地域でも  
あります。『大高根基地斗争』とつながりながら  
すすめられた『土地返せ!』のたたかいでしたが、  
その源流をつくったのは、『生活記録運動』など  
によって育てられた北方文化ではなかったのかと  
の思いを深くしました。」

○第4号 98年／冬 (1999年3月10日発行)B5  
版 (26 ページ)

イスラム教の数珠 (土田茂範)

市場にて (水沢治雄)

ズッコケ母、返上なり (半田 都)

うさぎのダンス (山口和子)

詩 (伊藤保子) 牛車ドリッカー、ガガー／電  
話

父のカメラ (阿部千恵子)

童話 雨ガッパのテント (阿部千恵子)

守りたい、わが家の味 (葉山真衣)

村山市西部産業廃棄物処分場をめぐる これま  
での経過

編集後記(花鳥賊康繁)

○第5号 99年／春 (1999年5月30日発行)B5 版  
(30 ページ)

漢 俳 (土田茂範)

童話 陽子 (高橋徳義)

偉句 (茂木克博)

いま、なに色? (山口和子)

短歌 野痢(寒河江徳子)

ズッコケ母、今日も行く(半田 緑)小学校 5 年  
生の息子の作文を全文引用「感想文が書けない」  
春祭りに(伊藤保子)

「雨ガッパのテント」に寄せて(阿部千恵子)

百姓を公務員に(花鳥賊康繁)

編集後記(花鳥賊康繁)

○第6号 (2000年2月20日発行)北の風の会 B5  
版 (30 ページ)

華甲寿(カコウノジュ)(土田茂範)

カンボジア見聞録 1. 炉端のフランスパン 2.  
アンコールワットの案内人(水沢治雄)

素敵な出会い(山口和子)

どうなる、母なる最上川(伊藤保子)

思い出の歌のこと(阿部千恵子)

ヤッコ、やっちゃん、そして(伊藤保子)

師走のできごと(葉山真衣)

川賊の村 花鳥賊という苗字をさぐる(花鳥賊康  
繁)

編集後記(花鳥賊康繁)「年四回発行予定の「北の  
風」も、原稿募集も依頼もしないで進めてきたら  
掲載する原稿が途絶えてしまった。七号の原稿を  
大至急寄せていただきたい。」

自主的な投稿による運営の困難さが示されてい  
る。この次の第7号からは、マイナーチェンジが  
行われ、執筆者も新しいメンバーが加わってくる  
ことになる。

○第7号 2000年・春 「心つなごう」・イラスト  
(2000年5月5日発行)B5 版 (27 ページ)

\*この号から巻頭言が「『北の風』発刊によせて」  
から高橋義徳による「もろ声 北の風に」の詩に変  
更される。

児童文化運動をふりかえる(土田茂範)「これら  
の(山形県児童文化研究会を中心とする…引用者  
注)運動の中で須藤克三先生は、『生活綴方を縦糸  
とし、児童文化を横糸』とすることと、『地域に  
根ざす』という大きな、二つの活動の指標を示さ  
れた。」

ふろしきが しやべる～体験的 土田茂範さんおぼ  
え書き～(花鳥賊康繁)

私のハイラル・一九三九年——「落ちこぼれ」と  
ノモンハン事件——(阿部千恵子)

短歌 桜咲く道 (影山静子)

「北の風の会」会員名簿<土田茂範顧問、花鳥賊  
康繁編集長を含む40名。(定期購読者を除く)「北  
の風の会」へのおさそい

会員は村山地方を中心に米沢市以外の山形全県  
にわたり、新潟県や福島県の在住者も含まれてい  
る。

ジョーハツ志願しまつ記(花鳥賊康繁)



あとがき (花鳥賊康繁) 「『北の風』の母胎である梟? 民の学習サークル『村の根っ子の会』は、その児童文化運動の流れで高まった北村山の民間学習運動、『農民大学』から生まれたものです。」  
○第8号 2000年・夏 (2000年8月15日発行) 版画・菊池隆知 B5版(32ページ)

「化外の民」と「怨念」と(土田茂範)  
四国にて 青年／婦人／はり紙 (水沢治雄)  
童話 白馬、飛ぶ (花鳥賊康繁)  
母の日に想う (高橋恵子)  
緑の風の贈り物 (小林万里子)  
尊敬する人 (相模清之)  
まず人間であること (村山第一)  
ズッコケ母、今日も行く でき悪組編 (半田都)

素敵な出会い 大暮山分校 (山口和子)  
村山・産廃処分場問題  
ある創始者の生涯 河上清没後五〇年によせて (須貝和輔)  
藤沢周平のこと (土田茂範) 山形児童文学研究会

『気流』96号(1982年8月)  
「子どもに残したい話」原稿募集  
あとがき(花鳥賊康繁)  
『北の風』の執筆者のひとりである、吉川晴栄氏は

「村の大家族の家に嫁ぎ、嫁、母親、祖母として生きた二十年間の生活記録」をまとめて、風の会が母胎となっていると思われる北の風出版から『あぜ道ひとり——わたしの今昔』という刊行図書を発行している。個人の記録に、実際に生きる人間としての個性・典型性と普遍性・歴史性を見ることができる。

また、『北の風』に見られる「風の会」の会員が関わっているサークルとその機関誌は、

東根の読書会「ひこうき雲」  
山形童話の会「もんぺの子」  
山形農民文学懇話会「地下水」  
山形児童文化研究会「気流」  
が認められた。さらに多くの会やサークルに、各々の会員が参加していることが推測されるが、ここに、大小、複数のサークルとともに、「風の会」が存在していることがわかる。そのようないわば重層性のあるものとしての新しいサークルの意識

や組織のあり方を見ることができる。

#### IV 考察のまとめと課題

これまで見てきたように、「風の会」とその生活録交流誌『北の風』は、地域的および組織的にも広がりや層性を持ちながら、結集性の強いものであった。その具現化を支えたもののひとつに、精神的支柱としての亡き高橋義?氏、文章家・文化人としてのリーダーである土田茂範氏、実務的なコーディネーターである花鳥賊康繁氏という人物をあげることができるであろう。このような中心人物の複数性ということも指摘できる。これらの意味で、『北の風』は、新しい生活記録(運動)のひとつの具体的な実践であるということができる。

一方、同じあすなろ書店が発行している生活記録誌に『あすなろ』がある。編者は、村山順一・花鳥賊康繁・網千富士恵・松浦幸子・奥山乃里子・堀直子の連名となっており、『北の風』の編者、花鳥賊康繁氏の名前も見られる。しかし、『北の風』が広い地域にわたるものであったのに比べて、東根市という地域に限定されたものとなっている。その一例を1999年11月に発行された第10号の目次と編集後記に見てみることにする。

おさなぎ地名考(斎藤吉弘)

鈴虫の孵化(中 英子)

「東根の大ケヤキ」を国の天然記念物にした男 (野口孝雄)

なぜ樹周十二・六メートルか? (星川賢隆)

ニガウリがやってきた (国分正三郎)

東根の祭りと行事 (六) (横尾勝兵衛)

「最近の子ども」 (柏倉 新)

評語の楽しさ (斎藤耕治郎)

季節の花のように (奥山しげ)

短歌 (蟹沢短歌会)

俳句 (東根俳句会)

川柳 (東根川柳愛好会)

こんな本おもしろいよ

たんぼぼのように (高橋美紀)

若者の文化にもっと目をむけよう

推理小説と直木賞

編集後記「4年目にしようやく10号にたどりつきました。初めは3号でつぶれなければなんとかなるだろうと思って、軽い気持ちで始めたので

すが、いったん原稿をいただいしまうと、出さないというわけにはいかず半ば「公」の存在になりつつあることを痛感しています。／10号はひとつの到達点であるとともに節目でもあります。『地域にこだわる編集方針』のもと、文学会、絵画愛好会、歌人クラブ、俳句会、川柳愛好会には毎号ご協力いただけるようになりました。（中略）

『地域文化交流誌』と言える内容になってきました。タウン誌とはひと味違った手作り感覚の地域の情報誌として脱皮出来ればとの下心をもっております。」

表紙絵「最上川」(吉田泰三)／中表紙(花鳥賊愛)商業主義のタウン情報誌ではないそこに生活する人々の諸相が伺われ、また、情報を交流することができる「地域文化交流誌」の姿を見て取ることができるだろう。このようなあり方もまた生活記録(運動)の新しいあり方のひとつとすることができる。

#### 【注】

- 1) 鶴見和子(1958)「生活綴方の定義」日本作文の会『生活綴方事典』明治図書
- 2) 高橋昭(1956)『村の生活記録運動』農村漁村文化協会 pp.217-221
- 3) 鶴見和子(1961)「生活記録運動のこれまでとこれから」『日本の記録・1号』、ここでは、『生活記録運動のなかで』(1963)未来社 pp.197-200 に拠った。
- 4) 鶴見和子(1986)「生活記録運動の戦後と現在」『国民文化』1月号、ここでは『鶴見和子曼陀羅Ⅱ 人の巻—日本人のライフ・ヒストリー』(1998) pp.600-616 に拠った。

#### 【参考文献】

- ① プラマー(1991)『生活記録の社会学—方法としての生活史』光生館(原著は、1983年)
- ② 中野卓・桜井厚(1995)『ライフ・ヒストリーの社会学』弘文堂
- ③ 反差別国際連帯解放研究所しが(1995)『語りのちから——被差別部落の生活史から』弘文堂
- ④ 佐藤真(1997)『日常という名の鏡』凱風社
- ⑤ 大島一雄(1998)『人はなぜ日記を書くか』芳賀書店
- ⑥ やまだようこ(2000)「人生を物語ることの意

味」『教育心理学年報』vol.39、pp.146-161

編集部注 初出

『教育学研究紀要』46[(2)]中国四国教育学会編(中国四国教育学会, 2001-03)